

清末の中国人が編纂した日本語教科書における文法教育 ——内容、方法と理念

劉 賢¹

要旨：本稿では、清末の中国人が編纂した三つの日本語教科書『東語入門』、『東語正規』、『實用東語完璧』における文法の扱いに焦点を絞り、内容・方法・理念と三つの視点から比較考察を通してその三つの日本語教科書における文法教育の特徴を探り、現時点の日本語の文法教育にどのような示唆を与えてくれるのかを考察した。

キーワード：熟読・暗誦、品詞分類、文法用語、場面・機能、認知能力、

はじめに

清末の日本語教科書を扱う研究に関しては、代表的なのは、李小蘭(2003, 2006)、鮮明(2011)、陳娟(2012, 2014)などが挙げられる。いずれの研究も清末の日本語教科書の特徴を明らかにする上で示唆的な研究であると言えるが、清末の日本語教科書における文法の扱いに焦点を当てた代表的な研究は鮮明(2011)であると言える。が、鮮明(2011)は、言語学史の視点から発せられたものであり、教科書における文法内容の記述に重点が置かれており、清末の日本語教科書の内容を把握する上で大変参考になれるが、文法内容の配置、文法の説明方法、文法用語の使用などにはどのような教育的な理念と工夫が示されているのか、現時点の日本語の文法教育にどのような示唆を与えてくれるのかに関する分析はあまりないと言える。

本稿では、先行研究を踏まえ、表1に示された三つの教科書²における文法の扱いに焦点を絞り、内容・方法・理念と三つの視点から、縦断的な比較考察を通して清末の中国人の編纂した日本語教科書における文法教育の特徴を探り、現時点の日本語の文法教育にどのような示唆を与えてくれるのかを考察したい。

書名	著者	発行年	発行地
《東語入門》	陳天麒	1895年	未詳
《東語正規》	唐寶鏗 戢翼翠	1900年	作新社
《實用東語完璧》	新智社編輯局	1903年	新智社

表1 考察対象

¹ 西藏民族大学、北京外国語大学

² 劉建雲(2005: 278)。

1. 『東語入門』³ (1895年)

『東語入門』は光緒二十一年(1895年)に刊行され、陳天麟により編纂されたものである。日本語教科書が欠乏していた当時の中国では、日本語学習者が選択できる唯一の日本語学習書であると見なされている⁴。

1.1 内容:

『東語入門』は内容から見れば、大きく「音声」と「語門」の二つの部分から構成されており、「語門」の部分は更に「上巻」と「下巻」の二つの部分から構成されている。

1.1.1 音声

「音声」の部分では、「イロハ」の48音が提示された後、「清音」、「濁音」、「次清音」が順次に提示されている。しかし、「清音」、「濁音」、「次清音」のような音声学的な用語が使用されているにも関わらず、それらの概念に関する説明は行われていない。特徴としては、仮名毎にその脇に音注漢字(華音)が表記されていることである。音注漢字(華音)に関しては、凡例で述べられたように、殆ど当時の江蘇省と浙江省の方言を基準にしているが、中国語で対応する「音」が見つからない場合、反切音を使用している⁵。例えば、「ヒ」に対応する音が中国語に存在しないため、「黒以」で表記されたのである。

字母⁶
いろはにほへとち
イロハニホヘトチ
以洛哈泥化海託氣
清音
ア(矮)イ(以)ウ(烏)エ(賢)オ(啞)カ(卡)キ(克以)ク(苦)ケ(開)コ(誇)
サ(殺)シ(希)ス(司)セ(息)ソ(沙)タ(他)チ(氣)ツ(之)テ(鐵)ト(託)
濁音
ガ(額)ギ()グ(餓)ゲ(呆)ゴ(岳)ダ(達)ヂ(其)ヅ(治)デ(笛)ド(獨)
ザ(若)ジ(其)ズ(是)ゼ(席)ゾ(孰)バ(拔)ビ(皮)ブ(捕)ベ(培)ボ(薄)
次清音
パ(派)ピ(披)プ(普)ペ(配)ポ(撲)

表2 『東語入門』における音声の扱い

³ 書誌と著者の履歴に関する考察は鮮明(2011)、陳娟(2014)を参考されたい。以下同様。

⁴ 実藤(1942:274)。

⁵ 李小蘭(2003)、鮮明(2011)、陳娟(2014)。

⁶ 紙幅の関係で部分列挙。以下同様。

1. 1.2 語門：内容語・固まり表現

「語門」では、表3のように、幾つかの概念に基づき、「天文門」、「人物門」、「飲食門」などのような部門が設定されており、当該の部門に関連する語彙或いは表現がそこに収録されている。

『東語入門』目次： 卷上：天文門 郡園門 人倫門 文事門 服飾門 時令門 君臣門 人物門 武備門 宮室門 地理門 刑法門 形體門 珍寶門 飲食門 卷下：舟車門 器用門 醫道門 采色門 數目門 秤尺門 果蔬門 草木門 花卉門 飛禽門 走 獸門 鱗介門 昆虫門 進口貨門 出口貨門 一字語門 二字語門 三字語門 四字語門 談論門

表3 語門

例えば、「天文門」では、表4に示されたような語彙が収録されている⁷。

天球（テンキウ）天像（テンニアラワレルモノ）青天（アラゾラ）天気（テンキ）天涯（テンガイ） 天河（アマノガハ）（中略）暑天（アツゾラ）陰天（クモリタルテンキ）旱天（カンバツ）天（テン）日（ヒ）日暈（カサ）日食（ニツショク）月（ツキ）月食（グワツショク）星（ホシ）流星（ヨバヒボシ）彗星（ハハキボシ）火焰星（ヒバチ）星宿（セイザ）……………（ドセイ）風（カゼ）順風（オイデカゼ）（中略）暴風（ボウフウ）風靜（カゼナキ）雲（クモ）雨（アメ）急雨（ヒトフリノアメ）露（ツユ）霧（キリ）霞（カスミ）雹（アラレ）霰（シモ）雷（カミナリ）電（イナビカリ）霜（シモ）雪（ユキ）冰（コヤリ）虹（ニジ）月虹（ツキノニジ）北斗（ホクト）龍取水（タツマキ）
--

表4 天文門

表4から分かるように「天文門」に収録されたのは、全部「天文学と気象学」に関わるものであり、その脇にも日本語訳と音注漢字の両方が表記されているが、日本語訳に関しては、「陰天（クモリタルテンキ）」、「風靜（カゼナキ）」、「天像（テンニアラワレルモノ）」のような意識したものもあれば、「暑天（アツゾラ）」のような直訳した「ブロークンな日本語」もある⁸。

その上、収録されたものの品詞的性格から見れば、「一字語門」までの各部門に入ったのは、大体「月」・「友達」のような普通名詞や「天に現れたもの」のような「名詞句」であり、「一字語門」に入るのは、「誰（だれ）」のような人名詞や「再（ふたたび）」のような副詞もわずかに散見できるが、「少（すくない）」のような形容詞と「過（すぎる）」のような動詞がほとんどである。「二字語門」に入るのは、「因此（このゆえに）・幾乎（たいてい）」のような副詞、「欺侮（いじめ）・忘記（わすれる）」、「送來（おくりきた）・送去（おくれた）」のような動詞である。「三

⁷ 紙幅の関係で語彙に付けられた音注漢字を省略。

⁸ 鮮明（2011）。

字語門」と「四字語門」に入るのは、主として「運氣好(うんよろし)」のようなフレーズレベルのものであるが、最後の「談論門」⁹⁾に至って初めて「請問尊姓(ごセイメイは)」、「我信你言(アナタノハナシホントウニオモウ)」のような文レベルのものが出現するようになった。

そのように、「東語入門」で提示されたのは、主に「名詞・動詞・形容詞」のような内容語(実詞)と「直接にコミュニケーションに使用できるフレーズレベルか文レベルのもの」であり、「助詞」や「助動詞」のような「機能語(虚詞)」は単独で取り上げられていない。

1.2 方法と理念

同書の内容提示から見れば、「音声→一字語→二字語→三字語→句(フレーズ)→文」のように「音声から文へ」、即ち「小さな言語単位より大きな言語単位へ」というプロセスで順次に提示されている。

“按日本字與語同四十八字母，一字一音聚音成言就言見義或兩三字成一言或五六字成一義間有七八字至十數字者頗似西文拼字之法以視我國之每字各具其義者判然不通矣。”(自序2頁)

が、全書を通して限られた音声学的な用語においては、「動詞」、「名詞」、「形容詞」のようなメタ言語的の用語が見られず、品詞分類や文の構造に関する説明なども行われていない。が、向けられた使用者の立場(日本語初心者)に配慮する一因がある(是書專為初學者而作祇從省便並未多錄言語¹⁰⁾)と共に、音声から文までのいずれの言語要素も未分化なままで熟読・暗誦¹¹⁾を通して使用者に体得させようとする学習観に支配されていると見られる。

“右日本字母四十八字其草書曰平假名皆成一字故反為大寫其正書曰偏假名如中國偏旁等類未成一字故反為小寫學者於字母先宜考求聲音變正依次讀熟然後學習拼法則次序不紊入門亦宜矣。”

“此係東字拼法夫東語之所以千變萬化而層出不窮者均不外此四十八字拼合而成學者於是書誦習既久自不難造於高明之域焉。”

“是書專為初學者而作祇從省便並未多錄言語然苟以是書熟讀則酬應之地貿易之場與日人交談亦未始不敷所用也”(凡例4頁)

にもかかわらず、全書を通して音声、語彙、フレーズと文のいずれにも「音訳漢字(華音)」が表記されており、今の視点から見れば、必ずしも科学的であるとは限らないが、日本語を教える上で使用者の母語(中国語)の正の転移を生かす重要性を意識し、学習者に便利さを与え¹²⁾、学習効率を上げようとする著者の工夫が間接に窺える。

“首張所列字母其旁亦注以華音使學者讀去自能一目了然。東字拼法頗與西文相同，書中所載拼

⁹⁾ 『談論門』に収録されたものでも、談話レベルの意味的なつながりのあるものと言えるのは、「你能操華語否，我畧能几句」と「你好酒量…並非客氣」の2箇所しか確認されていない。

¹⁰⁾ 凡例4頁。

¹¹⁾ 陳娟(2014)

¹²⁾ 李小蘭(2003:40)

法旁注華音無不辯正學者用心研究自能得其正音也。”（凡例 3 頁）

音声：いイ（以） りリ（利） れレ（立） ゐ井（伊） 語彙：雨天（ウテン烏聽） 春（ハル哈路） 天下（テンカ聽卡） 句（フレーズ）：運氣好（ウンヨロシ烏痕慾洛希） 不偏不倚（カタヨラヌカ他欲辣奴） 文：煩你商量（アナタニソウダンスル阿那他泥沙達痕司路） 請坐（オカケナサイ啞卡開那殺以）
--

表 5 扱われる言語単位

その上、部門別に語彙を配置することも、「冷天（サムソラ）・暑天（アツゾラ）」のような直訳した「ブロークンな日本語」が随所見られるにもかかわらず、使用者（学習者）の立場から考えれば、同類のものが一つのカテゴリーにまとめられ、自分のニーズに応じて必要な語彙を便利に抽出できるという点では、70 年代に外国語教育研究界に生まれた「概念・機能シラバス」の理念と近似しており、効果的な語彙指導法であると言える。

“～書中所分各類名目悉照中國類書之例句斟字酌繆析條分便於查覽”（同書：凡例 4 頁）

2. 『東語正規』（1900）

『東語正規』は清朝光緒二七年十月（1900 年）日本留学経験を有した唐寶鏗と戢翼舉に編纂され、竹新社によって発行されている。中国人が日本語を初めて科学的に研究する本である¹³とされている。

2.1 内容

卷一 語法 文字朔源 文字區別；字母原委 字母音圖；字母解釋 音調；拼音法 音調 變音 文法摘要；虛字 言彙；學期 學訣； 卷二 散語 天文類 時令類 數目類 顔色類 …宮室類 國民類 …動作成語類 …品行 類…衣服類 問答 日用語 燕居語 訪友語 遊歷語 慶賀語 吊唁語 買賣語 商業語 學校語 天 時語 消遣語 辭別語 卷三 語決 史事三則 人事六則 附 泰西誓言十三則

表 6 『東語正規』の構成

表 6 から分かるように、本書の内容は合わせて三つの部分から構成され、卷一、卷二と卷三では、それぞれ文法、語彙と会話、文章が扱われており、文法、語彙、会話・文章は連動させて扱われるのではなく、完全に切り離されて別々に扱われているのである。

2.1.1 「文法」への捉え方

卷一 語法 文字朔源 文字區別；字母原委 字母音圖；字母解釋 音調；拼音法

¹³ 実藤（1970:298）。

音調 變音 文法摘要；虚字 言彙；學期 學訣；

表7「語法」の包括範囲

「卷一語法」の構成からみれば、「音声」、「音調」、「文字」もその範囲に含まれているが、日本における「文法」という概念の変遷に関しては、明治前後に亘って、漢文法、蘭文法と英文法、それぞれの影響を受け、大きな変革を経てきたものであり、時期と学者の主張により、その指す範囲も必ずしも一致しているとは限らない。江戸期の漢語漢文学では、海保青陵の『文法披雲』（1798年）に「今余ガ説ク文法ハ、文ヲ書ク法ユヘ、…先凡ソ文章ノ地形ヨリ築ク法ナリ」と説いているように、文法は“grammar”の意味での文法として使用されるのではなく、普通、漢詩文における「文章の修辭法」といった意味で使用され、幕末から洋学者の間では、「語法」、「文法」という用語が広く使われるようになってきているが、明治期に至っては、日本は欧米の文明、文化の摂取に努めようとする風潮は文法研究にも影響をもたらし、「文法」は“grammar”の訳語としての「文法」として認識されるようになってきている¹⁴。が、山田孝雄の『日本文法論（1908）』までは、「音声論」、「品詞論」、「文章論」が全て文法の部門として捉えられるのが普通であったが、「文字論・言語論（品詞論）・文章論・音調論」が文法の部門としてされていた文典（中根淑『日本文典』1897）があれば、「字学・詞学・文章学」が文法の部門として考えられた文典（田中義廉の『小学日本文典』）もある¹⁵。しかし、山田孝雄（1908）では、「音声論」は物理的・生理的現象であり、「語法」や「句法」は人間の精神現象に関することであると考えられ、「音声論」が「文法の部門」から除かれ、それ以降は、文法の部門と言え、品詞論」と「文章論」の二部門が意識されるようになったと言われている¹⁶。

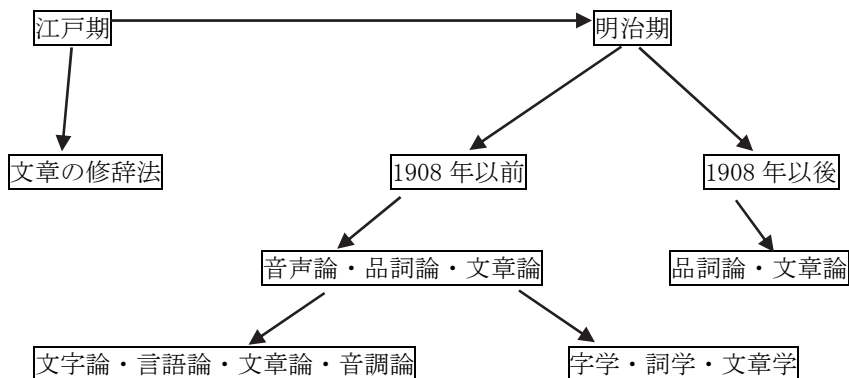


図1「文法」という概念の変遷¹⁷

「音声」、「音調」、「文字」も文法の範囲に含まれている点から見れば、『東語正規』は明治期の

¹⁴ 古田（2010：44-45）第4巻。

¹⁵ 古田（2010：154）第4巻。

¹⁶ 古田（2010：46）第4巻。

¹⁷ 古田（2010：44-101,第4巻）の論述を参考した上で作ったものである。

1908年以前の日本の文法研究者の「文法」への捉え方と深く関連するように考えられる。

2.1.2 品詞分類と文法用語

既述した通り、『東語入門』では、品詞分類はもとより、「動詞」などのようなメタ言語用語も一切使用されておらず、言語単位を未分化なままで一つの固まり表現として「熟読・暗誦」を通して定着させようとする傾向が強いが、『東語正規』では、「品詞を立てること」を「文法体系を構築するための第一歩である（言語之中有區別然後有文法名稱者文法之始也）」と位置づけられ、日本語の品詞は「動詞（附助動詞）、形容詞、副詞、名詞、代名詞、感嘆詞、接續詞、後詞（天爾遠波）」のように8種類に分けられている。

“言語之中有區別然後有文法名稱者文法之始也。環球有文字之邦，皆有文法。雖各國互異。至於言語之稱謂則一。日本言語之名稱共分八種。即名詞，代名詞，動詞（附助動詞）形容詞，副詞，後詞（天爾遠波），接續詞。感嘆詞是也。各詞之中。又有各項名稱。各種變化。條理繁密。非一朝一夕所能深究也。”（同書 24～25）

品詞分類に関しては、山東功(2002)によると、明治前期の文法研究の流れを系統別に分類すれば、普洋学の影響を受け、全体の体系と枠組みを洋文典に依った「洋学系統」と江戸期以来の国学の影響を受けた「国学系統」とに分けられ、両者の一番大きな違いは品詞分類にあり、洋式文典では、普通八或いは九品詞を取るのに対して、国学文典では、三或は四品詞を取っているとされている。そして、品詞名に関しても、洋式文典の方は洋文典の訳語に準拠し、「名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、助詞、接續詞、感動詞」などの名称を採用しているのに対して、国学系統の方は主に八衢派と呼ばれる本居春庭の『詞八衢』の影響を受け、「体言、用言（作用言と形状言）、接辞（テニヲハ）」のような名称を採用するのが普通であると言われている¹⁸。

八品詞を採っている点やその品詞名から見れば、『東語正規』は明治期の洋式文典における品詞分類に倣っていると見られる。

が、立てられた品詞名から見れば、「助動詞」ではなく、「附助動詞」という名称を採用し、それを独立の一品詞として認めないと見られるが、下位分類をした場合、「被性之助動詞／能性之助動詞」のように、「助動詞」という名称も採用することがあった。「助動詞」という品詞名に関しては、明治前期のほとんどの日本文典では、取り上げられておらず、田中義廉の『小学文典』（1873）では、一応「助動詞」の項目を立てていたが、それを一品詞として扱っておらず、「助動詞」を独立の一品詞として設置したのは、大槻文彦の『語法指南』においてである¹⁹。

その上、「助詞」ではなく、「後詞（天爾遠波）」という名称を採用し、その定義に関しては、説明を行っていないが、“且人以虚字為關係詞；日本之虚字即天爾遠波是也”²⁰という記述から見

¹⁸ 山東功（2002:107-122）。

¹⁹ 古田(2010:198～199)第4巻。

¹³ 同書 49頁。

れば、同書に出現した「虚字」、「関係詞」とは等価の概念「虚字＝関係詞＝後詞（天爾遠波）」とされていたと推察されるが、日本語を論ずる場合、「虚字」を使用したのは、梁啓超も挙げられるが、本書で「虚字」として挙げられたもの（表 8）から見れば、梁啓超の『和文漢読法』²¹における「虚字」の包括範囲と異なり、「助動詞」や「副詞」などがそこから除外され、現代日本語における「助詞」と内実から見ればほぼ一致していると見られるが、“～終止言者。即已終局語尾之變化也。下祇可接助動詞虚字。不能接名詞…續體言（又連體言）者即接續名詞代名詞之語尾變化也。下可接助動詞虚字”²²から見れば、「虚字」に「助動詞」も含まれているというような記述も見られている。

“東語之有虚字。猶車之有軸。戸之有樞也。若不識虚字貫穿之法。則詞不達意，虚實相需。關係甚嚴。（日人以虚字為關係詞），日本之虚字即天爾遠波是也。如漢文之焉哉乎也。天爾遠波四字。雖不足以盡虚字。然此四字。乃虚字中最難最廣。為虚字主腦。故總其稱曰。テニヲハ。其用法。千變萬化。難以枚舉。”（同書 49 頁）

“～終止言者。即已終局語尾之變化也。下祇可接助動詞虚字。不能接名詞。～續體言（又連體言）者即接續名詞代名詞之語尾變化也。下可接助動詞虚字。”（同書 22 頁）

テ・ニ・ヲ・ハ・ヘ・ト・ド・デ・ゾ・モ・ノ・カ・ガ・ヤ・バ・ノミ・バカリ・ダニ・マ デ・サヘ・カラ・ヨリ・トモ・コソ・ナガラ・トテ
--

表 8『東語正規』における「虚字」

「後詞」、「天爾遠波」に関しては、明治前期の文典では、「後詞」、「天爾遠波」、「前詞」、「前置詞」、「後置詞」、「関係詞」、「助詞」、「てにをは」などが並存した用語であり、文典と学者により、いずれかを使用する場合もある。「天爾遠波」に関しては、大槻文彦の『語法指南』に出現した用語であり²³、江戸期には、オランダ語の“hulpwoord”の訳語としての「助詞・助言」という名称が「助動詞」の方に使われていたが故に、それとの混同を避けるために考えられたものであると言われている²⁴。しかし、大槻文彦による「天爾遠波」は、その内実から見れば²⁵、ほぼ現代日本語における「助詞」に相当していると言えるが、但し「現代日本語における終助詞」が大槻文彦の「天爾遠波」に含まれておらず、「感動詞」の方に含まれていたのであると注意される。『東語正規』でも、表 8 で示されたように、終助詞は「天爾遠波」に内包されず、大槻の捉え方と同じく「感動詞」に含まれているのである。

「後詞」に関しては、英語の“preposition”に対する「前置詞」という訳語に由来し、英文典

²¹ 『和文漢読法』4-5 頁（沈翔雲編，勵志會譯書處，明治 33 年）。

¹⁵ 同書 22 頁。

²³ 『広日本文典』では、「弓爾乎波」を使用。

²⁴ 古田（2010:52-53）第 4 巻。

²⁵ 『語法指南』86 頁－116 頁。

に依ったものであり、その定着は慶応年間と言われており、一部の文典では、そのまま「前置詞」として取り入れるのには抵抗があり、「前詞」として取り入れた文典があれば（『太田氏会話篇』、蘭文典を範にして「助詞」を全て名詞の格に含ませ、「後詞」や「前置詞」のような品詞を認めていない文典もある²⁶（田中義廉の『小学日本文典』）。一方、「後詞（あとことば）」や「後置詞」という名称を採用する文典（中根淑の『日本文典』や古川正雄の『絵入知恵の環』）があれば、少数ながらも「助詞」（黒川真頼による『日本小文典』や『皇国文典初学』など）と「関係詞」（チャンバレンによる『日本小文典』）を使用する文典もある²⁷。

「テニヲハ」に関しては、その由来から言えば、漢文訓読の際に補読される語の意味で、助詞・助動詞など種々の語を含む名称であるが、「て・に・を・は」のそれぞれが助詞であるため、助詞の代名詞的な使われ方もする場合があるが、それを品詞分類の一品詞として最初に使用したのは鈴木胤の『言語四種論』であるが、但し、鈴木胤の『言語四種論』では、「テニヲハ」を、「助詞・助動詞」だけではなく、感動詞・副詞・用言の活用語尾までその中に含めており、明治時代以後の文法でも「てにをは」を品詞の一名目として使用されたことがあったが、西欧文典の浸透に伴い、品詞名は、その訳語としての漢語名に統一されるようになり、「てにをは」は品詞名とされなくなったが、従来の流れを受け、「助詞の別称」として使われる程度である²⁸。

以上の考察から分かるように、『東語正規』は品詞項目を立てる上では、明治期の日本の洋式文典を参考にしていると言えるが、「後詞」、「関係詞」、「テニヲハ」、「天爾遠波」などの複数の文法用語の使用から見れば、誰一人の学者、或いは特定の文典からの影響ではなく、大槻文彦や中根淑などの明治期の複数の文法学者の文法観からの影響が見受けられていると見られるが、「虚字」、「後詞」、「天爾遠波」、「テニヲハ」などの多くの混乱しやすい文法用語を十分に統合していないと言えるのであろう。

2.1.3 言語単位

既述したように、『東語入門』では、提示された内容は言語単位から見れば、語彙と文レベルのものを中心としているが、『東語正規』では、語彙レベルや文レベルに止まらず、語彙を中心にした「散語」に、話し言葉を中心にした「問答」と書き言葉を中心にした「語決」も増設されている。

例えば、「卷二」の「散語」では、語彙を扱い、「天文類」、「顔色類」、「人倫類」、「衣服類」などのように、部門或いは概念ごとに関連した語彙を一つのカテゴリーに集めるという点では、『東語入門』の配置方法を踏襲していると言える。「問答」では、文や「意味的に繋がりを持つ

²⁶ 古田（2010:248-257）第4巻。

²⁷ 山東功（2002:118-119）。

²⁸ 『日本大百科全書（ニッポニカ）／ニッポニカ・プラス（小学館:1984-1994）』、日本語教育学会編（1982:100-101）と古田（2010:31）第3巻。

会話」を扱い、「表現機能」と「場面」別に「消遣語」、「辞別語」、「学校語」のような学習者の日常生活に関わる表現が配置されている。会話に出現した実例からも、中立的な叙述文ではなく、感嘆詞や終助詞などのついたものも見られる。

日用語	燕居語	訪友語	遊歴語	慶賀語	弔唁語
賣買語	商業語	學校語	天時語	消遣語	辭別語

表 9 表現機能と場面による内容提示

遊歴語：陸行²⁹

アナタハ旅行ナサイマスカ。 你出門去嗎

サヤウデゴザイマス 是的

何處ヘイラッシュアイマスカ上那兒去呢

西京ヘイキマス上西京去

間ニ合ヒマスカ趕得上火車罷

乗り後レマセウ怕趕不上了

……

「卷三 語決」に提示されたのは、書き言葉を中心にするが、単文ではなく、意味的な結束性を持つ文章であると見られる。

擇友³⁰

人ガ世ニ出テ友達ト交際スルニハ必ズ両眼ヲ開イテ其人ヲ見ル事ガ肝要デス正直デ禮儀ヲ心得テ居ル謙ツテ柔和ナ包ミ隠シノナイ世間ノ事ニ通ジテ居ルオノアル役ニ立ツ大丈夫ナ人ニ逢ヒマシタラ其人ト交際ヲシテ宜シイ… (一個人出來交接朋及總要帶雙眼睛，見了那正經的，老實的，懂得規矩的，有良心的，見過世面的，大才情的，有本事的，可以靠得住的，你纔好替他相與…)

表 10 語決

そのように、提示された内容を言語単位から見れば、『東語入門』に比べて、単文レベルを超え、「談話（文章）レベル」まで拡大していると言えるが、但し、文法内容から見れば、構文論や文章論に関する内容には言及していないと言える。

2.2 文法の「提示・説明」方法

文法の提示方法に関しては、文法項目を品詞別に提示した上で、特定の文法項目（主に品詞）の全ての用法・機能を一括して網羅的に並べる特徴が見られる。例えば、助詞の場合、全ての助詞をまとめて提示した上で、表（11）のように助詞「の」の全ての意味・用法も一括して提示し

²⁹ 点線は筆者。

³⁰ 同書 208-209 頁。

ている。

- | | |
|---|---|
| ノ | <p>之（指名名詞與名詞二語關休之語）（同書 53 頁～56 頁）</p> <p>(一) 示所有之意。（亦用ガ字，與第二意同）「猫の眼（猫所有眼）は時間によって度々変わります」猫眼因時而異。</p> <p>(二) 示關係之意。「世の中が（中字與世字有關係，故用ノ字以貫之）進めば進むほど人心が狡猾になります。（世間愈開化。人心愈狡猾。）</p> <p>(三) 示ニアル之意。「日本松島の（ニアル之意）景色が余程宜しいから三景の一に数えられます」日本松島の風景很好。故為三景之一。</p> <p>(四) 示デアル之意。「この一冊の辞書を皆一通り見て胸に落ちたならば日本語は十分です。」此一冊字典。若能悉看一遍，記在腹中。則日本語足矣。</p> <p>(五) 示ト云フ之意。「支那の（ト云フ之意）国は大変大きいです」支那之國頗大。</p> <p>(六) 示ノ様ナ之意。「此世界は夢の（ノ様ナ之意）世界であります」此世界如一夢之世界。</p> <p>(七) 無意義。用以連接前後之語。「近來の（的字意）音信は皆郵便局に頼みます。」近來的書信都託郵政局。</p> <p>(八) 示代名之意（不言物之名，而以ノ字代之，有將ノ字重言之者。如我國之的字，但必上已有物之名，下方可代之。「支那にも日本にも柿と梨がありますが、日本の（ノ柿と梨之意は種が小さくて甘くない様です。」支那同日本，都有柿子梨子，但日本的較支那的小而不甜。</p> <p>(九) 示ト云フノ之意（之同，與第五異不同）「人間は何故死ぬとの道理は実に大問題であります」</p> <p>(十) 疑問（ノデスカ此意）。「此帽子はあなたの」</p> <p>(十一) 并。（與ト字第五意，ヤ字第三意同，用於排句時）「不斷身鬣身勝手ばかりをするものは天下の乱れて来るときに此は私の家屋ですの、是は私の畑ですの、此は私の財産ですのと何の様に私の財産ですのとどの様に私の私のと云うても皆担いて歩くことができますか。（平常祇曉得專顧自己的人。到天下亂起來的時候。這是我的房子，這是我的田地。這是我的財產。隨便這樣說是我的。是我的。豈可都擔的走的嗎？</p> <p>(十二) 雖（與ケレドモ或ガ字第三意同。用於名詞之下。「西洋は文明と云うものの、野蠻の處もまだ少なくありません。」西洋雖稱文明。然而野蠻的地方亦不少。</p> |
|---|---|

表 11 助詞「の」の提示方法

文法の説明方法に関しては、表 11 と 12 から分かるように、「まず文法規則を与え、そして関連した例文を提示する」という明示的で演繹的な説明方法を取っているが、新しい文法項目の説明は既習の類義的な文法項目と関連付け、比較しながら行われていると同時に、説明に文体

的な差による類義表現間の使用頻度にも言及されている。例えば、表 12 で示されているように、「虚字」の「ガ」の意味と用法をそれぞれ「ハ」、「ノ」、「けれども」のような意味的に類似した既出項目と関連づけ、比較して説明し、「ばかり」の用法に関しては、「ノミ」と比較し、書き言葉においては、「ノミ」の方が多用されると説明している。

ガ (同書 57 頁)

- (一) 直説法。用于名詞下，與ハ字相似，開口語，無意義。「人ガ (文中均用ハ字，但畧者居多) 笑フ」
- (二) 示所有之意ノ字之轉與其第一意同。「我ガ国ハ大變古イデス」
- (三) 雖 示出乎意外之意。「問ヒマシタガ (與ケレドモ同) 答ヘマセン。」雖問不答。

バカリ (同書 58 頁)

許 日本用此字 (一) 只此。與ノミ同，文中用ノミ居多。「日本ハ維新以來三十年許リデ今日ノ様ニナリマシタノハ実ニ感心スベキコトデス。」日本維新以來。祇三十年。致有今日。真令人佩服。

ナガラ (同書 61 頁)

乍 日本用此字，亦作接尾語。(一) 雖字意。用于名詞下，デアルケレドモ之意。「失礼ナガラ御年ハ幾歳デスカ。」

(二) 且 有兼字意，專用于動詞連用言下，文中用ツツ居多。「戦ヒ乍ラ逃ゲマス」且戦且走。「読ミ乍ラ書キマス」且讀且寫。

表 12 「が」の提示と説明方法

2.3 理念

以上の考察からわかるように『東語正規』では、品詞立ての「文法体系を構築する上での重要性」を意識し、当時の洋式文典における品詞体系に倣い、品詞項目を立てた上で、各品詞に対する下位分類も行い、文法意識が本格的に確立されていると言えるのである。が、明治期の洋式日本文典から文法用語を移植し、使用する上では、統合性を欠き、混乱や矛盾を見せている。一方、提示された言語単位から見れば、従来 (『東語入門』) の「音声・語・文」レベルを超え、会話と文章を増設することにより、談話レベルまで拡大しているが、扱われた文法内容自体からみれば、品詞論に止まり、構文論には及んでいないと言える。文法の提示と説明方法に関しては、品詞別に文法項目の全ての意味用法を一括して網羅的に提示し、体系性を重視する傾向が強いが、既習の類義的項目と関連づけ、比較しながら説明する特徴も見られている。しかし、「文法」と「文法を定着させるための文章・会話」などとは完全に分割され、別々に提示され、文脈なしの状況で孤立的な文法知識を教え込むという傾向が強い。要するに、全体から見れば、言語知識の注入が重視され、産出を目指す練習問題が配置されていないという点から見れば、それなりの限界性を有していると言えるのであろう。

3. 『實用東語完璧』（1903）

《實用東語完璧》は、光緒二十九年（1903）に（上海）新智社に編集され、発行された日本語教科書である。その編集背景に関しては、凡例で述べられたように、日中間の貿易が盛んに行われていたことや日本へ留学に行く人が増加していたことを背景にし、それまでの日本語教科書は、貿易などのような特定の分野に特化したものがほとんどであると指摘し、本書は特定の分野に偏らず、様々なニーズに応じるため、日本語に関わる有らゆる言語現象を扱うことを旨としている。

日清比鄰漸形親密往來甚夥貿易繁昌今昔之觀固不可同日而語矣近年華人東渡遊學及營商者接踵而至日愈日亦月愈也渠等先以通曉日語為急務。而日語之著書坊間雖汗牛棟充均屬杜撰誤謬不堪枚舉否則專尚貿易家言本社有鑑於此不偏此亦不倚彼將日本一切語言悉蒐集成卷殆無遺漏倘攜此書一卷則於商務遊學遊歷考察諸大端凡一切酬應之東語無不備載是著書者之宗旨也（凡例 1 頁）

3.1 内容と方法

同書は「音声（計 9 章）」、「言語構造（計 9 章）」、「問答法（計 9 章）」、「会話（計 13 章）」、「練習問題の解答（計 9 章）」、「単語（計 30 章）」「(付録) 日本東京遊学指南（計 4 章）」と五つの部分から構成されており、合わせて 614 頁もあり、単に頁数と章数から見れば、三つの教科書の中で分量が最も多い日本語教科書であると言える。

3.1.1 「練習問題」の増設

上述したように、『東語正規』は、その構成から見れば、音声、語彙、文法の説明、いわゆる「言語知識」の注入に重点が置かれており、言語知識を応用し、定着させるための「練習問題」、つまり理解チェックや産出を目指す言語活動への関心が完全に欠けていると言えるが、本書では、「前課応用」が増設され、課ごとに「翻訳練習」が配置されるようになっている。「翻訳練習」は、更に「東譯練習」と「華譯練習」と二つの部分に分けられ、「第五編」にそれを解答するための「練習題解」も配置されている。例えば、「指示詞」と「授受」について説明した直後、表(13)のような練習問題が配置されているのである。

<p>東譯練習：(一) 給我這個 (二) 給我那個茶碗 (三) 給我靴子和刷子 (四) 給爾那個 (五) 給爾那個煙袋 (六) 給爾這個手布</p> <p>華譯練習：(1) コノ鉄ヲ下サイ。(2) コレヲ上ゲマス。(3) ソレヲ下サイ。 (4) 皿ヲ上マス。(5) コノ時計ト時計ノ鏈ヲ下サイ。(6) 汝ニ衣服ヲ上マス。</p>
--

表 13 練習問題

3.1.2 文法の提示・説明方法

「第三編 問答法標準」と「第四編 会話」では、表 14 で示されたように、学習者が現実生

活で遭遇し得る使用場面や特定の概念と機能を表すニーズが想定され、実用的な表現が多く取り込まれている。但し、『東語正規』では、話言葉を中心にした「門答」と書き言葉を中心にした「語決」の両方が提示されているが、本書で提示されたのは、話し言葉を中心にした会話である³¹。例えば、第五章の第四課『請客・招待』では、表15で示されたような会話が配置されている。

<p>第三編 門答法標準</p> <p>第一章 誰 第二章 地方 第三章 甚麼 第四章 時令 第五章 前章應用</p> <p>第六章 數目 第七章 雜辭 第八章 雜辭</p> <p>第四編 會話</p> <p>第一章 訪問（第一課 拜客；第二課 請託） 第二章 消遣（第一課 散步）</p> <p>第三章 學業（第一課 學堂；第二課 學外國語） 第四章 天時（第一課 天氣；第二課 春天） 第五章 飲食（第一課 早飯；第四課 請客） 第六章 送信（第一課 書信館；第二課 電報局） 第七章 鋪店（第一課 書鋪；第三課 銀行；第十課 鞋鋪） 第八章 商家用語（第一課 買賣；第三課 告白） 第九章 遊歷（第一課 上船；第四課 電氣車；第八課 問路） 第十章 辭別（第一課 回國辭行；第二課 出洋辭行） 第十一章 慶賀（第一課 拜賀；第二課 昇官；第三課 辭行） 第十二章 人物（第一課 醫生；第三課 學生；第四課 莊稼漢） 第十三章 雜類（第一課 年紀；第三課 照相；第五課 問疾；第七課 丟東西）</p>
--

表14 場面と機能による内容の配置

<p>請客・招待</p> <p>今兒晚上請幾位客呀。今晚、何人御招キニナルノデゴザイマスか。我請了六位。六人、招待シマシタ。</p> <p>在哪屋裏擺呢。何処ノ部屋エ並ベマショウカ。在西屋里擺罷。西ノ部屋へ列ベナサイ。</p> <p>牛肉羊肉家裡都有麼。牛肉羊肉ワ、皆家ニアリマスカ。有是有可不夠了。アルコトワアリマスガ、足リマセン。那麼買一隻雞罷。ソナナラ、鶏ヲ一羽、買イナサイ。老爺酒菜準備好了。且那樣、料理ノ用意ガ、デキマシタ。那麼快擺上吧。ソナナラ、早く列ベナサイ。</p>

表15 會話

文法に最も密接に関わるのは、第二編の「言語組織法標準」であるが、虚字（助詞）の日本語学習における重要性とその習得上の困難さを強調し続けている。

“凡初學日語者、首當注意虚字及關係詞。然日語之關係詞甚多、而其最重要者為テニヲハ。為虚字之主腦。故總稱曰テニヲハ。其用法變化無窮。虚實相需。關係甚重。若不識虚實貫注之法、則不能得其趣旨。日語之有虚字、其猶車之有軸乎”（同書95頁）

にもかかわらず、文法項目の提示と説明方法では、『東語正規』と大きな異なりを見せている。

³¹ 紙幅の関係で下記の表に例示されたのは、一部分である。

例えば、『東語正規』では、特別に「文法摘要」の部分を設置し、それを更に幾つかの部分に分け、「名詞」、「動詞」、「形容詞」、「助動詞」などのように、品詞項目別にその意味・用法を提示し、体系的に説明する傾向が示されている。例えば、「ヲ・ハ・ヘ・ト…」などは「虚字」の部分に網羅され、各助詞の全ての意味・用法が一括して説明されているのに対して、『實用東語完璧』では、特別に「文法」の部分が設置されておらず、表 16 で示されているように、まず章名ごとに特定の「意味」或いは「表現機能」が確立された上で、課ごとにそれらの意味と表現機能を表すのに必要な文法項目だけ配置されているのである。

第二篇 言語組織法標準

第一章 授受（①給我、給你②前課應用③這個那個）第二章 請求，願望（①買給、賣給、送給、教給、換給、看看②借、還、拿、折、我）第三章 命令（①聽、念、開、看、洗、試、數、點、問、猜、想；②走、來、坐、去、等）第四章 定辭（①是不是②前課應用）第五章 有無（①有沒有②前課應用③前課應用④前課應用⑤前課應用）第六章 想（①我想②前課應用）第七章 要第八章 愛第九章 言語時異法

表 16 章立て

第一章 授受

第 1 課 給我，給爾 第 2 課 前課應用 第 3 課 這個，那個 第 4 課 交給，借給，還給

表 17 課の配置

例えば、表 17 から分かるように、第一課、第三課と第四課のタイトルである「給我，給爾・這個，那個・交給，借給，還給」のいずれも「授受」という意味を表すのに必要な言語要素であると言えよう。故に、本章における第一課、第三課、第四課では、表 18 で示されているように、それぞれ「ヲ」、「ヲ下サイ」、「コレ・コノ・ソレ・ソノ・アレ・アノ」、「テ」などの文法項目が配置されているのである。

第一課：ヲ 略有將字把字意。用以連接名詞與動詞之間。示以關係。即所謂虛字也。

…ヲ下サイ 給我

第三課：這個 コレ コノ ソレ ソノ 那個 アレ アノ

コレ ソレ アレ 三者。乃指主事物之時。所用之詞也。而コノ、ソノ、アノ之三者。乃指主事物之時。所用之詞也。有近稱，中稱，遠稱之別。即如左。

事物：コレ、近稱 ソレ、中稱、アレ、遠稱

指示：コノ、近稱 ソノ、中稱 アノ、遠稱

第四課：テ 承上接下詞。與漢文而字同。

…ヲ渡シテ下サイ 交給我； …ヲ渡シテアゲマス 交給你

…ヲ貸シテ下サイ 借給我； …ヲ貸シテ上ゲマス 借給你

…ヲ返シテ下サイ 還給我； …ヲ返シテ上ゲマス 還給你

表 18 文法項目の配置方法

その上、文法項目の意味用法の提示・説明に関しても、『東語正規』と同じく「まず文法規則を与え、それから関連した例文を提示する」と言う明示的で演繹的な説明方法を取っているが、網羅的にその全ての意味・用法を一括して提示し、説明するのではなく、唯当該の章或いは課に関わる意味と用法の説明に止まっている。例えば、「ヲ」の意味用法について、『東語正規』では、以下のように「ヲ」の全ての意味・用法を提示している。

㊦ (『東語正規』: 52 頁)

- (一) 處置事物也(其下必接他動詞), 如將字把字之意。「字ヲ書キ本ヲ読ミマス(寫字讀書)」
- (二) 下必接自動詞, 有自字從字意。如カラ二字。「国ヲ離レテ居ッタノガ三年デシタ。(離國已三年)」
- (三) 動作也。下必接自動詞。如第一意。「道ヲ歩キマス」行路。

しかし、『東語完璧』では、表 18 からわかるように、「ヲ」という助詞が複数の文法的な意味を持っているにも関わらず、第一章ではその全ての用法を網羅的に提示するのではなく、唯、授受を表すのに必要な「対象を示す」用法しか提示されていないのである。

そして、『東語正規』のように、「ヲ」や「テ」などを孤立的な文法単位として扱うのではなく、「…ヲ下サイ」、「…ヲ渡シテ下サイ」のように、ある特定の意味或いは表現機能(交給我; 交給你)に関連付けながら、他の言語形式と連動させた形で、一つのパターン或いは文型として定着させようとする傾向も示されている。

にもかかわらず、本書では、日本語の特徴としての「用言の活用」などには、一切触れずに、助動詞に関しても、取り上げられたものから見れば、断定を示す「ダ」、「マス」しか取り扱われていない。「虚字」の日本語学習における重要性は一応特別に唱えられながらも、凡例で“不偏此亦不倚彼將日本一切語言悉蒐集成卷殆無遺漏倘攜此書一卷³²”という意欲的な教育目標を掲げているにも関わらず、表 19 から分かるように、取り扱われた助詞の数にしろ、取り扱われた意味用法にしろ、体系性から見れば、『東語正規』に劣っていると言える。

第1章	授受	ヲ、～ヲクダサイ、～ヲアゲマス、ニ、 <u>ト</u> (與)、テ、
第2章	請求・願望	～テクダサイ、カラ(從)、へ、カラ(打)
第3章	命令	～ナサイ、～テオ出デナサイ(～去・来)、指示詞、ニ・へ(承上接下詞)
第4章	定辞	～ハ～デアル・デス・デアリマス、～ハ～デハナイ・デアリマセン、ハ、デアリマス、ノ、～サン、
第5章	有無ガ(主體)	マス、～ガ～アリマス・アリマセン、モ、 <u>ガ</u> (逆接)、～ガ～イマス・イマセン、～ガ～オリマス・オリマセン
第6章	想	ダ、 <u>ト</u> (内容)、カ、ヨリ、ヨリモ、

³² 凡例。

第7章:要 (要:~ガ~ホシイ・タイ); (不要:~ガ~ホシクアリマセン・シタクアリマセン)
第8章:愛 (愛:~ガ~スキデス・スキデアリマセン; 不愛:~ガ・ハ嫌いデス・スキデアリマセン)
第9章:言語時異法
(一定) 現在:~ます; 過去(過・了):~マシタ; 未来(要・能):~マシヨー
(現在:~マセン; 過去(過・了):~マセンデシタ; 未来(要・能):~マスマイ
「門答法標準」:~トモウシマス; ~デゴザイマス

表 19『東語完璧』で取り扱われた「文法項目」

3.2 理念

以上の考察からわかるように、『東語完璧』では、従来の『東語正規』などに比べて、「練習問題」が増設され、言語知識のインプットだけでなく、産出も重視されるようになったと言える。一方、文法項目の提示・説明方法に関しては、『東語正規』と同じように明示的で演繹的な説明方法を取っていながらも、『東語正規』における網羅的な提示方法と異なり、表現機能と場面に関連づけ、必要な項目を段階的に配置し、当該の章或いは課に関連した用法しか示していないのである。その上、孤立的な文法項目を示すだけでなく、他の言語形式と連動させ、即ち「文型」という形で定着させようとする傾向も示されている。それに関しては、本書で強調された「浅きものから深きものへ；易きものから難解なものへ（循序有條由淺及深由易及難）」という段階的な教育理念にも関連するように思われる。

“教育之道貴乎循序有條由淺及深由易及難否則徒使學者扞格耳故是書編成之次序用意於此尚云周密學者潛修不怠則入室則不難升堂也”（凡例1頁）“初入門即教以複雜之語言。隔不相入。記憶殊難。隨得隨失。收效極少。蓋學外國語言與童子之學話相等。使非由少而多。由易而難。則必不能領會。”（同書95頁）“此書為諸學堂之日語教科書尤其適當其在初步者可用第一編二編三編及增累而上者則適用其他諸編循序引申自可登峰造極。”（凡例1-4頁）

4. まとめ

以上の考察を通して、清末の中国人が編纂した三つの日本語教科書『東語入門』、『東語正規』、『實用東語完璧』における文法教育は、内容、方法、理念において以下のような特徴と傾向が示されていると考えられる。

(1) 内容から見れば、『東語入門』で提示されたのは、主として語彙（内容語）・フレーズ・文レベルのもので、品詞立てもメタ言語による文法説明も行われておらず、日本語を未分化なままで熟読・暗唱を通して学習者に身につけさせようとする傾向が強いが、それ以降の『東語正規』に至っては、提示された言語単位は音声、語彙・文レベルを超え、談話・文章レベルまで拡大していると共に、明治前期の洋式文典に倣い、品詞項目を立てられ、品詞分類も行い、学習者に暗唱ではなく、文法の説明を頼りにして理解を通して日本語を身につけさせようとする傾向が示されている。が、『實用東語完璧』において、いずれの教科書も言語知識の注入に偏重し、

理解チェックや産出につながる「練習問題」が配置されていないのである。その上、文法への主たる関心は音声と品詞に置かれており、文章の構造（テキスト）は言うまでもなく、文の構造（シンタクス）にも及んでいないと言える。

(2) 文法の教授方法と理念に関しては、『東語入門』では、文法の教授意識が全く希薄であり、日本語を未分化なままで身につけさせようとしているが、それ以降の『東語正規』では、文法の教授意識が芽生えており、日本語を音声、品詞などの言語要素に分解し、その一つ一つを学習単位として取り出し、項目積み上げ式に学習させようとしているが、文法の提示と説明方法に関しては、品詞別に文法項目の全ての意味用法を一括して網羅的に提示し、体系性を重視し、既習の類義的項目と関連づけ、比較しながら説明する特徴が示されている。更に、『実用東語完璧』では、文法項目の提示は、意味・機能にも関連付け、文法項目の意味・用法も一括して説明するのではなく、段階的に提示すると共に、文法項目も孤立的な文法単位としてではなく、ほかの言語形式と連動させ、パターンとして提示する傾向が示されている。

(3) 無論、それらの教科書における文法の扱いは、それなりの限界性もある。例えば、『東語正規』のように、「文法」を「文章・会話」、つまりそれが使われる状況などと完全に分割し、別々に扱い、文脈欠如の状況で文法知識を一方向的に教え込む、つまり有形の言語要素だけ（音声、品詞）に関心を寄せ、無形の文脈を軽視するのは、学習者の文法能力を発達させる上では、それなりの効果が期待されるが、実際のコミュニケーション能力（運用力）を育成する上では、必ずしも適切であるとは限らない。そして文法用語を使用する上でも複数の文法学者による文法用語を移植していながらも、それらの混乱しやすい用語を十分に統合せず、複数の用語で一つの品詞を指すというような混乱が見られ、学習者を困惑させかねないというような不備も抱えている。が、新しい文法項目を既習した類義的文法項目に関連付け、提示し説明するのは、新情報を既知の認知構造の中に組み込ませようとする学習者の認知能力を重視する認知心理学の理念³³に合致し、『実用東語完璧』のように場面・機能に基づく会話の配置方法と意味・表現機能に関連付けた文法項目の配置方法も学習者の実際の日本語運用能力を育成する上では、効果的な方法であると言え、現時点の日本語教育にも示唆を与えてくれると考えられる。

参考文献：

- 実藤恵秀. 1942. 中国人の日本語研究. 国語文化講座 6『国語進出篇』朝日新聞社
実藤恵秀. 1970. 『増補版中国人日本留学史』. くろしお出版
日本語教育学会編. 1982. 『日本語教育事典』. 大修館書店
名柄迪ほか. 1989. 『外国語教育理論の史的発展と日本語教育』. アルク
山東功. 2002. 『明治前期日本文典の研究』. 和泉書院
李小蘭. 2003. 试论清末东文学堂日语教科书. 解放军外国语学院学报

³³ 名柄迪ほか (1989:73)。

- 劉建雲. 2005. 『中国人の日本語学習史-清末の東文学堂-』 學術出版会
- 李小蘭. 2006. 清末中国人編日语教科書之探析[J]. 杭州师范学院学报(社会科学版)(04)
- 古田東朔著. 鈴木泰ほか編集. 『近現代日本語生成史コレクション：日本語のまなざし内と外から—国語学史1』 3卷. くろしお出版
- 古田東朔著. 鈴木泰ほか編集. 『近現代日本語生成史コレクション：日本語近代への歩み—国語学史2』 4卷. くろしお出版
- 鮮明. 2011. 清末中国人使用的日语教科書—一项语言学史考察—. 中央编译出版社.
- 陳娟. 2012. 早期中國人編纂的日語教科書—以《東語簡要》、《東語入門》、《東語正規》為例—. 東アジア文化交渉研究
- 陳娟. 2014. 清末中国人の日本語学習史に関する研究—教科書と辞書を通して. 関西大学博士学位申請論文.
- 史料
- 陳天麒. 1895. 『東語入門』. 発行地未詳
- 唐寶鏐 戢翼翬. 1900. 『東語正規』. 作新社
- 新智社編輯局. 1903. 『實用東語完璧』. 新智社
- 大槻文彦著. 北原保雄ほか編集. 平成8年. 『語法指南』. 勉誠社
- 大槻文彦. 明治30年. 『広日本文典』. 京築地活版製造所
- 沈翔雲編. 明治33年. 『和文漢読法』. 勵志會譯書處
- 付記：拙文所用史料由人民教育出版社课程教材研究所和日本关西大学沈国威教授提供，同时拙文执笔过程中，沈国威教授给予了诸多指导，在此，谨致以诚挚的谢意。

『或問』投稿規定

- 投稿資格は、近代東西言語文化接触研究会会員（入会は内田、又は沈まで）。
- 投稿論文は、原則として未公開の完全原稿とし、電子テキストとプリントアウトの両方を提出する。原稿は返却しない。
- 執筆者による校正は、二校までとする。
- 投稿論文は、本誌掲載後、他の論文集等の出版物への投稿を妨げない。
- 原稿作成に当たって、『或問』「執筆要領」を厳守する。
- 原稿料は支払わないが、雑誌を格安価格で提供する。

『或問』執筆要領

1. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
2. 字数は、16,000字（400字詰め原稿用紙40枚）までとする。
3. 簡単な要旨（原稿と異なる言語による）を付する。
4. 投稿は、所定のフォーマットを用い、表などは極力避ける。フォーマットは、沈国威までご連絡ください。
5. テンプレートを使用しない場合、テキストファイルの形で提出する。
6. 論文中に中国語などを混在させる場合、Windowsは、微軟Pinyin2.0（簡体字）、微軟新注音（繁体字）を用いること。
7. 注は、脚注を用い、文章の行中に（注1）のように番号を付ける。
8. 参考文献は、下記の体裁で脚注に付けるか、或いは文末に一括して明示すること。

（単行本）

或問太郎、『西学東漸の研究』、大阪：しずみ書房、2000年10-20頁

Bennett, Adrian A. *John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1967.

（論文）

或問花子、「東学西漸の研究」、『或問』第1号、2000年2-15頁

Fryer, John. "Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity." *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 7-20, 1890*, pp. 531-549.

9. 本文や注の中で、文献に言及するときには、或問太郎(2000:2-15)のように指示する。同一著者による同年の論著は、2000a、2000bのように区別する。

内田慶市 (u_keiichi@mac.com)

沈 国威 (shkky@kansai-u.ac.jp)